

価値管理方法論 Æilus v2.0

© Victor Bolshakov

出典明記を条件に自由に利用可能

<https://aeilus.tech>

第 1 章 導入と目的

Æilus は、社会経済システムにおける価値管理のための方法論である。本方法論は、価値管理理論（Value Management Theory, VMT）に基づいて構築され、価値および反価値のフロー、価値解釈、価値システムの持続可能性を実務的に扱うことを目的としている。

Æilus は、小規模な組織から複雑なエコシステムに至るまで、あらゆる社会経済システムに適用可能な汎用的な方法論として位置付けられる。

本方法論は、経済理論や既存のマネジメント分野、あるいは特定ドメインの実務手法を置き換えるものではない。それらを補完する形で、価値管理を意識的・検証可能・持続的に行うための厳密で一貫した枠組みを提供する。

1.1 Æilus の目的

価値管理理論（VMT）は、価値がどのように生成され、解釈され、移転され、消費され、そして変換されるのか、またそれらのプロセスを支配する基本的制約や規則性を記述する。しかし、VMT は意図的に、現実のシステムにおいて「具体的に何をすべきか」という問いには答えない。

Æilus はこのギャップを埋めるために、ドメイン非依存の規範的レイヤーを提供する。それは、以下の目的を達成するために、どのような管理介入が許容され、意味を持つのかを定義するものである。

- フロー抵抗を低減すること
- 価値システムの持続可能性を高めること
- 参加条件やドメイン方針を損なうことなく、実現価値を増大させること

したがって Æilus は、実務的なレシピ集でも、特定ドメインの方法論の代替でもない。本方法論は、正しい価値管理が成立するための境界条件を定義し、その範囲内で多様な実践、ツール、組織形態が用いられることを可能にする。

1.2 価値管理理論（VMT）との関係

Æilus は、論理的にも方法論的にも価値管理理論（VMT）に基づいて構築されている。

VMT は、価値の現実を以下の要素によって記述する。

- 存在論：アクター、要素、フロー、解釈
- 公理：文脈依存性、解釈の非対称性、価値保存則の不在
- 定理：持続可能性、リーケージ、フロー抵抗、解釈の動態

Æilus は、これらの基本的性質を破ることなく、どのように価値システムへ介入できるかを定義する。

Æilus における特定の実践の成功や失敗は、VMT を反証するものではない。それらはむしろ、理論的規則性の具体的な現れとして解釈される（例えば、フロー抵抗の増大や参加条件の破綻）。この意味で Æilus は、VMT の上に構築された方法論的上位構造であり、代替理論ではない。

1.3 Æilus の中核的アイデア

Æilus は以下の中核的アイデアに基づいている。

- マネジメントは指標ではなくフローを通じて作用する。価値と反価値は、固定的な成果や数値ではなく、トランスフォーマー間を流れる動的なフローとして扱われる。
- 価値解釈は管理可能である。計画価値（Vplan）、実現価値（Vreal）、回顧価値（Vretro）は異なる解釈であり、それらの整合は正当な管理対象である。
- Æilus は、計画価値（Vplan）が形成される以前の潜在価値（Vpotential）も扱う。それは、まだ特定の受け手やフローに結び付けられていない、解釈可能な状態変化の可能性である。
- Vplan の形成は管理行為として扱われる。それは、受け手の選択と価値提供の組織化を意味する。
- 反価値およびフロー抵抗は、主要な管理対象である。反価値の蓄積や解釈ギャップは、計画価値が増加していても、システムを劣化させる。
- システムの持続可能性は、局所最適よりも優先される。意思決定は、参加条件や重要な変換役割への影響によって評価される。
- 実践は、価値システムの文脈内でのみ許容される。普遍的に「良い」実践は存在せず、その許容性はシステム全体への影響によって決まる。

1.4 Æilus の機能概要

以下は、Æilus が実務でどのように機能するかの高レベルな概要である。具体的な要件は、原則、プロセス、役割によって形式化される。

Æilus は三つの柱によって実装される。

- 原則：正しい価値管理のための必須要件を定義する。（要素の可観測性、解釈の整合、参加条件の管理、フロー抵抗の低減など）

- プロセスとイベント：観測・分析・適応の反復的サイクルを通じて、原則の実行を保証する。
- 役割：責任を分配する。Value Transformer Owner (VTO) はトランスフォーマー内部の価値実現と変換を担い、Value System Owner (VSO) はシステム全体の持続可能性と整合性を担う。複雑性の増大に応じて追加の役割が導入される。

Æilus は、特定のツールや組織形態を強制しない。フロー抵抗を低減し、システムの持続可能性を損なわず、Æilus の原則を満たす限り、ドメイン固有の実践を用いることができる。

第2章：原則（P1-P10）

Æilus 方法論は、価値管理理論（Value Management Theory, VMT）から導出された、固定された一連の原則に基づいて構築されている。これらの原則は、価値管理において方法論的に許容される境界を定義し、価値システムを破壊的または体系的に有害な介入から保護する。

Æilus の原則は、推奨事項やガイドライン、あるいはいわゆる「ベストプラクティス」ではない。それらは、ドメイン、組織構造、使用されるツール、あるいは成熟度に関係なく遵守されるべき、必須の方法論的要件である。

P1. 価値要素の可観測性の原則

重要な価値要素および反価値要素は、特定され、可観測であり、測定可能で、価値システムのライフサイクル全体にわたって追跡されなければならない。可観測でないものは、意識的に管理することができない。

P2. 価値解釈の整合性の原則

計画価値（Vplan）、実現価値（Vreal）、回顧価値（Vretro）の解釈は、定期的に比較・更新されなければならない。解釈が整合していない状態は、隠れたフロー抵抗、反価値の蓄積、およびアクター間の信頼の漸進的な低下を引き起こす。

P3. 価値要素需要の更新原則

価値要素の種類および数量に対する需要は、現在の価値解釈およびアクターの参加条件に基づいて、定期的に再評価されなければならない。過剰生産と不足生産のいずれも、体系的な反価値の源泉となる。

P4. 持続可能性および参加条件の原則

アクターの参加条件、ならびに外部価値フローへの依存やリスクは、継続的に分析・監視されなければならない。価値システムの長期的な持続可能性は、局所的な効率や短期的な成長よりも優先される。

P5. フロー能力の原則

価値システムは、価値フローの高い通過能力を確保し、トランスフォーマー内部での価値要素の蓄積を最小化しなければならない。蓄積は、明示的に正当化された管理判断としてのみ許容され、フローに投入される前に価値解釈の再評価を必要とする。

P6. フロー抵抗低減の原則

価値システムへのあらゆる介入は、フロー抵抗の低減を最優先の目的としなければならない。フロー抵抗は、計画価値と実現価値の乖離、反価値の生成、あるいは生産されたが提供されない価値として現れる。

P7. 価値生産効率の原則

価値要素を生産する際、トランスフォーマーは、同等またはより少ない価値消費で、より高い実現価値を生み出す実践を優先すべきである。効率とは、努力量や活動量ではなく、実際に実現された効果に基づいて評価される。

P8. 実践選択におけるシステム優先の原則

価値生産のための実践の選択は、個別プロセスの局所最適化ではなく、トランスフォーマーおよび価値システム全体の能力向上を優先しなければならない。局所最適化は、システムの整合性や持続可能性を損なってはならない。

P9. 計画価値の正当化された成長の原則

計画価値の増大は、以下のすべての条件が同時に満たされる場合にのみ義務となる。すなわち、価値増大に対する確認された需要が存在し、それを生産するための十分な価値流入があり、対応する実現価値を提供できる能力が証明されており、かつ参加条件および価値システムの持続可能性が損なわれない場合である。

P10. 価値解釈の誠実性の原則

計画価値および実現価値の解釈は、誠実な意図に基づいて形成され、価値システム内部で検証可能でなければならない。局所的な利益のために意図的に価値を誇張または過小評価することは、方法論的違反に該当する。

解釈の誠実性は、アクター間の合意を要求するものではない。不一致は許容されるが、体系的な歪曲は許容されない。

第3章：役割（VTO / VSO / スケーリング / サ

Æilus は、原則と反復的な運用ループを通じて適用される。これらのループを現実の価値システムにおいて持続可能なものとするため、Æilus は制御を集中させることなく、価値ダイナミクスに対する責任を分配する役割モデルを導入する。

Æilus における役割は機能的なものである。それらは、価値の生産、価値の提供、およびシステムの持続可能性に対する責任を定義する。役割は、職位、階層、あるいは組織上のポジションを意味するものではない。

3.1 役割モデルの構造

Æilus v2.0 では、役割を以下の三種類に分類する。

- 基幹役割 — すべての価値システムにおいて必須となる役割。
- スケーリング役割 — 複雑性やフロー構造が拡大した場合に導入される役割。
- サポート役割 — 正しい導入と方法論的整合性を確保するために導入される役割。

3.2 基幹役割

Value Transformer Owner (VTO)

Value Transformer Owner (VTO) は、特定のトランスフォーマーが価値を実現し、持続可能に変換する能力に対して責任を負う。

VTO は、トランスフォーマー内部の活動がもたらす結果について責任を持つ。

- 受信者に提供される実現価値
- 副次的に生成される反価値
- トランスフォーマーの運用によって生じるフロー抵抗
- システム内で劣化せずに参加し続ける能力

VTO は、トランスフォーマー内部で使用する実践について、選択、適応、検証、および廃止に対する責任を負う。

VTO は、計画価値を継続的に増加させる義務を負わない。計画価値の成長は、提供能力が確認され、参加条件および価値システムの持続可能性が損なわれない場合にのみ許容される。

Value System Owner (VSO)

Value System Owner (VSO) は、価値システム全体の持続可能性と整合性に対して責任を負う。

VSO は以下を保証する。

- すべてのアクターの参加条件が時間を通じて維持されていること

- システム境界および重要なフローが明示され、理解されていること
- 外部からの流入および流出への依存関係が把握されていること
- 局所最適化がシステム全体の持続可能性を損なわないこと

VSO は、個々のトランスフォーマー内部の作業を管理しない。この役割は、価値システムの長期的な健全性と安定性を維持するために存在する。

3.3 スケーリング役割

Flow Owner

Flow Owner は、トランスフォーマー間の価値提供が、継続的なフロー抵抗や未提供価値の原因となった場合に導入される。

Flow Owner はトランスフォーマー間の空間に注目する。

- 送信者と受信者間の価値解釈の整合
- インターフェースにおけるフロー抵抗の低減
- フロー全体にわたる価値の蓄積および損失の防止

Flow Owner は VTO の代替ではない。この役割は、価値が境界で失われる状況において、トランスフォーマー間の合意形成を促進し、提供能力を回復するために存在する。

Practice Owner

Practice Owner は、一つの実践が複数のトランスフォーマーで共有される場合、あるいは特に重要で専任の責任が必要な場合に導入される。

Practice Owner の責任は以下のとおりである。

- 実践の形式的定義を維持すること
- 正しい実装および適応が行われていることを保証すること
- いわゆる「カーゴカルト的」利用を防止すること
- 必要に応じて実践の見直しや廃止を主導すること

Practice Owner は、実践そのものの整合性に責任を持つが、個々のトランスフォーマーの成果には責任を持たない。

Domain Owner

Domain Owner は、特定のドメイン（例：性能、可用性、セキュリティ、継続性、アーキテクチャ、知識管理など）が、価値解釈やシステムの持続可能性にとって重要となった場合に導入される。

Domain Owner の責任は以下のとおりである。

- ドメイン方針の定義および維持

- 実践およびプロセスをドメイン要件に照らして評価すること
- ドメイン違反によって生じる体系的反価値を特定すること
- 持続可能性や参加条件を脅かすドメインリスクを早期にエスカレーションすること

3.4 サポート役割

Æilus Master

Æilus Master は、Æilus 方法論が正しく導入され、一貫して適用されることを支援する。

この役割の目的は以下である。

- 方法論的整合性を維持すること
- カーゴカルト的導入を防止すること
- 複雑な状況における役割間の連携を支援すること
- 整合および回顧イベントをファシリテートすること

Æilus Master は、価値の生産や提供を管理しない。この役割は、方法論の正しさに対して責任を負う。

第4章：プロセスとイベント

Æilus は、一度きりの施策や期限付きの変革プロジェクトとして実装されるものではない。それは、価値システムを時間の経過とともに可観測で、整合的かつ持続可能な状態に保つための、反復的なプロセスとイベントの集合として運用される。

価値管理理論（VMT）の観点では、価値は本質的に動的である。価値解釈は変化し、フロー抵抗は蓄積し、反価値が発生し、外部依存関係も時間とともに変化する。Æilus のプロセスは、これらの動態に対して、偶発的ではなく意識的かつ制御された対応を行うために存在する。

4.1 Æilus におけるプロセスとは何か

Æilus のプロセスとは、観測・分析・適応からなる定期的なループである。これらは、価値システムに対して以下の根本的な問いに、繰り返し向き合わせることで、原則を実装する。

- 現在、どの価値要素および反価値要素がシステム内を流れているのか
- 計画価値（Vplan）、実現価値（Vreal）、回顧価値（Vretro）の解釈はどのように異なっているのか
- フロー抵抗はどこで、なぜ発生しているのか
- 参加条件および価値システムの持続可能性は維持されているのか

プロセスは、どの実践を使用すべきかを規定しない。それらは、観測可能なシステム挙動に基づいて、実践を選択・検証・置換・廃止できる規律を提供する。

4.2 Æilus におけるイベントとは何か

イベントは、Æilus 方法論を組織的に起動させるための節点である。それらは、価値解釈の整合、提供の検証、およびシステムレベルのシグナルを明示化するために用いられる。

イベントが存在しない場合、価値に関する作業は再び不可視化され、非公式な意見や局所的なナラティブ、メトリクス主導の歪みに回帰してしまう。

4.3 基本運用サイクル

成熟した Æilus 実装は、以下の四層からなる連続的なサイクルで運用される。

- 観測 — 価値要素、反価値、蓄積の可視性を維持する
- 整合 — 送信者と受信者の間で価値解釈を同期する
- 介入 — フロー抵抗を低減し、実現価値を高めるために実践を調整する
- 安定化 — 参加条件およびドメイン方針の遵守を保証する

このサイクルの目的は、最終的な「最適状態」を達成することではない。変化する環境の中で、再現性、予測可能性、持続可能性を維持することにある。

4.4 必須プロセス群

1) 可観測性と要素ライフサイクル

原則 P1 を実装し、原則 P5 を補完する。

- 重要な価値要素および反価値要素の特定と追跡
- 要素タイプおよび解釈の一貫性の維持
- トランスフォーマー内部における価値要素の蓄積の監視
- フロー投入前の、保管された計画価値の再評価

2) 解釈の整合と検証

原則 P2 および P10 を実装する。

- 計画・実現・回顧価値解釈の比較
- 解釈基準の明示化
- 受信アクターによる実現価値の検証
- 体系的な解釈歪曲の検出

3) 需要および数量の再評価

原則 P3 を実装する。

- 価値要素の種類および数量の再評価
- 過剰生産および不足生産の特定
- 生産された価値に対する受信者および提供可能なフローの確認

4) 持続可能性、リスク、外部依存関係

原則 P4 を実装する。

- 重要アクターの参加条件の監視
- 外部流入・流出への依存関係の把握
- リークージおよび構造的脆弱性の特定
- 計画価値の成長がリスクとなる場合の安定化判断

5) フロー抵抗および反価値の低減

原則 P6 を実装する。

- V_{plan} と V_{real} の乖離分析
- 反価値の発生源の特定
- トランスフォーマー内外の抵抗箇所の局在化
- 抵抗を移動させるのではなく、低減する介入の優先

6) 実践の選択・検証・廃止

原則 P7 および P8 を実装する。

- 消費価値あたりの実現価値に基づく実践選択
- トランスフォーマーおよびシステム能力を高める実践の優先
- 観測可能な効果による実践の検証
- 持続可能性を損なう、または体系的反価値を生む実践の廃止

7) 計画価値の正当化された成長

原則 P9 を実装する。

- 価値増大に対する需要の確認
- 十分な価値流入および生産能力の確認
- 実現価値の提供能力の確認
- 参加条件および持続可能性が損なわれないことの検証

4.5 推奨イベント

Æilus は固定的なイベントカレンダーを強制しない。しかし、最小限かつ持続可能な実装では、通常以下のイベントが含まれる。

- Value System Review — システム境界、アクター、重要フロー、依存関係のレビュー
- Interpretation Alignment Session — 重要フローにおける価値解釈の整合
- Flow Resistance Review — ボトルネック、蓄積、未提供価値の特定
- Practice Review Board — 実践の導入・適応・廃止の評価
- Value Retrospective — 将来判断改善のための回顧価値分析

4.6 プロセスの責任分担

Æilus の各プロセスには明確な責任が割り当てられる。役割モデルは、各ループを維持する責任主体を定義する。

- VTO — トランスフォーマー内部の可観測性、実践選択、局所反価値の低減を担当する
- VSO — システムの持続可能性、構成、成長と安定の均衡を担当する
- Flow Owner — 重要フローにおける抵抗と解釈整合を担当する（導入時）
- Domain Owner — ドメイン方針遵守およびドメイン起因反価値の防止を担当する（導入時）
- Practice Owner — 共有実践の整合性と許容性を担当する（導入時）
- Æilus Master — 方法論的整合性の維持とカーゴカルト導入の防止を支援する

4.7 良好な運用の特徴

健全に運用されている Æilus システムは、以下の三つの可観測な特性を持つ。

- 価値解釈が時間を通じて同期され、検証可能である
- フロー抵抗および反価値が蓄積するのではなく、減少している
- 環境変化にもかかわらず、システムの持続可能性が維持されている

第5章：アーティファクトとレポート

Æilusにおいて、価値に関する作業は可観測であり、比較可能であり、議論可能でなければならない。明示的なアーティファクトが存在しない場合、価値管理は主観的解釈、局所的な物語、および事後的な正当化へと退行する。

Æilusにおけるアーティファクトは、単なる記録やドキュメントではない。それらは、方法論の中核原則を実運用に落とし込むために存在する。すなわち、価値および反価値要素の可観測性、価値解釈の整合性と誠実性、フロー抵抗の低減、そして価値システムの持続可能性を支えるためのものである。

5.1 Æilusにおけるアーティファクトとは何か

アーティファクトとは、価値システムの一部を構造化して表現したものである。それは暗黙知を明示知へと変換し、意思決定に利用可能な形にする。

アーティファクトは、以下の問いに答えられる必要がある。

- どのような価値要素および反価値要素がシステム内に存在するのか
- それらの要素はどこを流れているのか
- どこで蓄積しているのか
- 異なるアクターによってどのように解釈されているのか
- どこでフロー抵抗や反価値が発生しているのか

Æilusにおいて、意思決定に寄与しないアーティファクトは有効ではない。意思決定目的を持たないアーティファクトは、それ自体が反価値を生み出す。

5.2 基本的なアーティファクト群

1) Value System Schema (VSS)

Value System Schema (VSS) は、価値システムを形式的に記述するための構造である。アクター、トランスフォーマー、フロー、および重要な価値移転を表現する。

VSS はシステム境界を明確にし、不可視な外部依存関係の存在を防ぐ。トランスフォーマーレベルおよびシステム全体レベルの双方で存在し得る。

2) Value Element Registry と Element Typology

重要な価値要素および反価値要素は、識別され、時間を通じて追跡されなければならない。

Value Element Registry は、どの要素がシステムにとって重要であることを定義する。

Element Typology は、フローを一貫して解釈するための要素タイプを定義する。

3) Value Interpretation Model

価値解釈は、Æilus において明示的な管理対象である。システムは、計画価値、実現価値、回顧価値の解釈を比較できなければならない。

代表的なアーティファクトには以下が含まれる。

- Value Interpretation Matrix
- Interpretation Change Log

これらのアーティファクトは、価値解釈の誠実性を保証する。意見の不一致は許容されるが、体系的な歪曲は許容されない。

4) 需要およびバランスモデル

価値要素に対する需要は動的であり、明示的に表現されなければならない。

このカテゴリに含まれるアーティファクトは以下である。

- Element Demand Model
- Supply–Demand Balance Map

これらは、過剰生産、不足生産、および価値の誤配分を可視化する。

5) フロースループットと蓄積ビュー

高いスループットと制御された蓄積は、システムレベルでの重要な要件である。

該当するアーティファクトは以下である。

- Value Flow Map
- Flow Accumulation Heatmap

蓄積は、意識的な管理判断としてのみ許容され、フロー投入前に再評価を必要とする。

6) フロー抵抗および反価値レジスター

フロー抵抗と反価値は、Æilus における主要な管理対象である。

代表的なアーティファクトは以下である。

- Flow Resistance Register
- Anti-Value Source Map

これらは、抵抗や反価値を単発事象ではなく、体系的ダイナミクスとして可視化する。

7) トランスフォーマー効率および能力モデル

Æilus における効率は、消費された価値に対する実現価値の比率によって評価される。

該当するアーティファクトは以下である。

- Value Production Efficiency Model
- Transformer Performance Profile

これらは、トランスフォーマーの提供能力が時間とともに向上しているか、あるいは劣化しているかを示す。

8) プラクティスポートフォリオおよびシステム影響評価

実践は、個別成果ではなく、システム全体への影響によって評価される。

該当するアーティファクトは以下である。

- Practice Portfolio
- System Impact Assessment

これらは、実践やシステム構成の変更が、フロー抵抗、反価値、および持続可能性にどのような影響を与えるかを評価する。

5.3 レポート：アーティファクトから意思決定へ

アーティファクトは構造を捉え、レポートは時間的ダイナミクスを可視化する。レポートは、静的な状況報告のためではなく、傾向やリスクを特定するために用いられる。

レポートは、以下の問いに答えられる必要がある。

- 時間の経過とともに何が変化したのか
- どこでフロー抵抗が増加しているのか
- どこで反価値が蓄積しているのか
- 計画価値と実現価値がどこで乖離しているのか
- システムの持続可能性が脅かされていないか

5.4 最小限のレポートセット

- Planned vs Realized Value Gap Report
- Flow Resistance Report
- Anti-Value Dynamics Report
- Throughput & Accumulation Report
- Transformer Efficiency Report
- System Sustainability Signal Report

5.5 アーティファクトの規律

Æilus では、以下の厳格な原則が適用される。

すべてのアーティファクトには、所有者、更新サイクル、および明確な意思決定目的が存在しなければならない。

責任主体や意思決定目的を持たないアーティファクトは、保守コストや誤った安心感という形で、不可避免的に反価値を生み出す。

第6章：ドメインとポリシー

Æilus において、価値は決して文脈から切り離されて提供されるものではない。同一の価値要素であっても、それが生成・提供される文脈によって、受容可能と解釈される場合もあれば、受容不可能（反価値）と解釈される場合もある。

Æilus は、このような文脈を「ドメイン」として形式化し、ドメインが課す制約を「ドメインポリシー」として定義する。ドメインは任意の付加要素でも、副次的な品質属性でもない。それらは、提供された価値が許容され続けるか、あるいは反価値へと転化するかを決定する。

6.1 なぜドメインが必要なのか

よく見られる体系的な失敗は、局所的には価値があると認識されるものが、システム全体では反価値となってしまうことである。

例えば、機能的な改善が、機能の観点では妥当であっても、セキュリティ、可用性、継続性、信頼性の観点では受容不可能である場合がある。このような場合、価値が否定されるのは無用だからではなく、価値システムへの安全な参加に必要な条件を侵害しているためである。

ドメインは、これらの境界を明示化するために存在する。

6.2 定義：ドメイン

ドメインとは、価値解釈の文脈であり、トランスフォーマーが採用する実践、プロセス、および成果の許容性に対して要件を課すものである。

ドメインは以下の性質を持つ。

- 直接的に価値を生み出すものではない
- 許容不可能な反価値の生成を防止する
- 時間を通じて価値の許容性と持続可能性を保護する

ドメインが必要とされるのは、価値の解釈が、何が提供されたかだけでなく、どのように、どのような条件の下で提供されたかに依存するためである。

6.3 定義：ドメインポリシー

ドメインポリシーとは、特定のドメインにおいて実践が許容されるために、満たすべき制約条件の集合である。

ドメインポリシーは以下を定義する。

- どの価値を生産すべきかは定義しない
- 反価値を生み出さずに価値を生産する方法を定義する
- 参加条件およびシステムの持続可能性が侵害されないことを保証する

6.4 ドメインを同期メカニズムとして捉える

ドメインは、トランスフォーマーと受信アクターの間で、価値解釈を同期させるためのメカニズムとして機能する。

ドメインは次の問いに答える。「この価値は、受信者にとって重要な制約条件の下で、受容可能であるか？」

ドメインが存在しない場合、システムは局所最適化へと傾く。トランスフォーマーは生産量や計画価値を最大化する一方で、受信者は不安定性、リスク、隠れた反価値を被ることになる。

6.5 ドメインを通じた実践の評価

Æilus において、実践は抽象的に「良い」「悪い」と評価されることはない。

実践が許容されるのは、次の条件をすべて満たす場合に限られる。

- トランスフォーマーのドメインポリシーを満たしていること
- 受信アクターの価値解釈を侵害しないこと
- 参加条件および価値システムの持続可能性を損なわないこと

同一の実践であっても、あるドメインでは許容され、別のドメインでは許容されないことがあり得る。

6.6 代表的なドメイン

Æilus は、閉じた、または普遍的なドメイン一覧を定義しない。どのドメインが重要となるかは、価値システムの文脈によって決定される。

代表的なドメインには、以下が含まれる（これに限定されない）。

- 性能
- 可用性および継続性
- セキュリティ
- アーキテクチャ
- 継続的改善
- 知識管理

価値の正しい解釈に、明示的な品質制約の定義が必要となった場合、ドメインは導入される。

6.7 Domain Owner の役割

特定のドメインが、価値解釈やシステムの持続可能性にとって重要となった場合、Domain Owner の役割が導入される。

Domain Owner は以下に責任を持つ。

- ドメインポリシーの定義および維持
- 実践およびプロセスをドメイン要件に照らして評価すること
- ドメイン違反によって生じる体系的反価値を特定すること
- 持続可能性や参加条件を脅かすドメインリスクを早期にエスカレーションすること

Domain Owner は、直接的に価値を生産する役割ではなく、Value Transformer Owner を置き換えるものでもない。

要約すると、ドメインは価値を最適化するものではない。価値が許容不可能になることを防ぐために存在する。

第7章：プラクティス・コレクション

Æilusにおいて、プラクティスは「ベストプラクティス」ではなく、中央集権的に強制されるものでもない。それらは、トランスフォーマー内部で機能する、形式化された局所的価値システムとして扱われる。

トランスフォーマーが単一の人間アクターではなく、チーム、部門、サービス、あるいは機能といった組織単位である場合、そこには必然的に内部の価値システムが存在する。Æilusでは、こうした内部価値システムをプラクティスとして記述し、管理する。

7.1 定義：プラクティス

プラクティスとは、トランスフォーマー内部に存在する局所的価値システムを形式的に表現したモデルである。それは、入力される価値および反価値要素がどのように実現・変換・保持され、出力される価値および反価値要素がどのように生成されるかを定義する。

プラクティスは、抽象的に「正しいやり方」を記述するものではない。それは、どの価値が消費され、どの価値が、明示的かつ検証可能な条件の下で生産されるかを記述する。

7.2 プラクティスと価値のライフサイクル

Æilusにおけるプラクティスは、価値管理理論（VMT）で定義される価値のライフサイクル全体に作用する。

- **Vpotential** — まだ特定の受信者やフローに結び付けられていない潜在価値
- **Vplan** — 定義されたフローを通じて特定の受信者に向けられた計画価値
- **Vreal** — 消費の瞬間に生じる実現価値
- **Vretro** — 以前に実現された価値の回顧的再評価

一つのプラクティスは、以下を行うことができる。

- **Vpotential** を **Vplan** に変換する（探索・分析プラクティスなど）
- **Vplan** を実現・変換する（提供・実装プラクティス）
- 反価値およびフロー抵抗を低減する
- トランスフォーマーの持続的な価値提供能力を高める

7.3 プラクティスのインターフェース：入力と出力

プラクティスを組み合わせ、管理可能なプロセスとして構成するためには、すべてのプラクティスが明示的に定義されたインターフェースを持つ必要がある。

これらのインターフェースには以下が含まれる。

- 入力される価値および反価値要素

- 出力される価値および反価値要素
- フロー抵抗、スループット、参加条件に対する想定効果

インターフェースが整合している場合にのみ、プラクティスはプロセスとして組み合わせることができる。整合しないプラクティスは、必然的に反価値や隠れたフロー抵抗を生み出す。

7.4 プラクティス・カタログと ÆVRI の役割

Æilus は、Æilus Value Research Institute (ÆVRI) を通じたプラクティスの蓄積、分析、進化を前提とする。

プラクティス・カタログは、普遍的な解決策の一覧ではない。それは、文脈、許容条件、観測された効果が明示された、検証済みの局所的価値システム（プラクティス）のキュレーションされた集合である。

カタログへの掲載は、プラクティスの普遍的な許容性を意味しない。許容性は常に、具体的な価値システムの文脈によって決定される。

7.5 プラクティス選択の責任

プラクティスの選択、適応、組み合わせ、および廃止は、Value Transformer Owner (VTO) の責任である。

VTO は以下を担う。

- カタログからプラクティスを選択し、トランスフォーマーのプロセスを構成する
- 実現価値を高め、フロー抵抗を低減するためにプラクティスを適応させる
- プラクティス利用によって生じる反価値に対する責任を負う
- ドメインポリシーおよび参加条件の遵守を保証する

プラクティスは外部から強制されるものではない。それらは、許容され、かつシステム的に正の効果を生み出す限りにおいてのみ有効である。

7.6 プラクティスはレシピではない

Æilus は、プラクティスをレシピやチェックリスト、あるいは機械的な模倣へと還元することを意図的に避ける。

プラクティスが意味を持つのは、以下の場合に限られる。

- その効果が可観測であること
- 前提条件が明示されていること
- 他のプラクティスとの相互作用が理解されていること
- システム全体への影響が継続的に検証されていること

この意味において、プラクティスは実験的でありながら規律的である。それらは観測とフィードバックを通じて進化し、盲目的な模倣によって拡散するものではない。

7.7 結語

プラクティス・コレクションは、価値システムの制御された進化を可能にする。それは、教条主義な再利用を避けつつ再利用を可能にし、混乱を伴わない多様化を実現し、持続可能性を損なうことなく改善を可能にする。